

展 望

J Aの進むべき道



自己改革を实践し、 組織基盤強化に取り組む

いよいよ平成30年度を迎え、今年度は、第27回 J A 全国大会で決議した「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」を基本目標とした創造的自己改革実践の最終年度となります。また、政府が定めた農協改革集中推進期間は31年5月までであり、その意味でも、30年度はまさに正念場の1年であります。

創造的自己改革とは「組合員の願いを実現するため、各々の J A が多様な農業・地域の実態に応じて、自らの創意工夫に基づく積極的かつ多彩な事業と組織活動を展開し、地域の農業とくらしになくてはならない組織となること」であります。改革の具体的実践内容は、それぞれの J A で異なっており、J A の数だけあると言えます。

J A の最大の強みは組織基盤にあり、協同組合において、組織基盤の弱体化は、致命傷であるといっても過言ではありません。組織基盤とは、土壌であります。良い土壌を作ればそこには立派な木が育ち、良い果実を収穫することができます。しかし、土壌が疲弊し、荒れた土壌では、良い木は育たず、良い果実も稔りません。

戦後、農協が発足して70年が過ぎ、その間、取り巻く環境が激変し、世代交代が進み、組合員が異質化・多様化する中で、組合員意識も変化してきました。しかし、これに対応した組織基盤強化のための活動が十分であったか、今あ



中家 徹

(J A 全中会長)

らためて、確認する必要があるのではないのでしょうか。

いずれにしても、良い土壌を作ることです。全国の J A の土壌は多種多様であり、まずは土壌分析をして、その地域に合った肥料を選択し、施用することが重要です。間違った肥料を施用すると、土壌は逆に悪化します。その肥料こそは、各 J A が創意工夫して実践されている改革メニ

ューではないのでしょうか。

その J A や地域に合った肥料を施用し、組合員の皆さんから「 J A はなくてはならない必要な組織」との高い評価をいただくことができれば、まさに素晴らしい土壌ができたことになり、つまりは、組織基盤強化が進んだこととなります。これを全国の J A が進めることで、協同組合の原点に還った、新たな協同組合として出発できると確信しています。

J A グループに対し、現場実態とかけ離れたさまざまな議論がなされ、改革を求められていることには、歯がゆい思いですが、一方ではこれをチャンスと捉え、自己改革を实践し、組織基盤強化に取り組むことが重要です。まさに「ピンチはチャンス」であります。

平成、最後の1年、自己改革に取り組んで締めくり、新たな年号のスタートとともに、われわれ J A も生まれ変わり、新たな J A としてスタートしたいものです。共に頑張りましょう。